

『少年の日の思い出』ディベート～エーミールと僕～

ディベート論題Aの立論

〈エーミール側〉

これから、エーミール側の立論を始めます。

僕たちは、エーミールの方がちょうを収集する人として適していると主張します。その根拠は2つあります。

第1の根拠は、エーミールがちょうを大切に扱う人だからです。「彼の収集は、小さく貧弱だったが、こぎれいなのと手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた」というところから、エーミールの方がちょうを大切に扱う人だと分かります。

第2の根拠は、彼がちょうへのやさしさ、思いやりがある人だからです。「彼は、傷んだり、壊れたりしたちょうの羽にかかわでつぎ合わすという非常に難しい、珍しい技術を心得ていた」という点からも、第1の根拠のように、エーミールはちょうを大切に思い、扱う人だと分かります。そして、このちょうを大切に扱うちょうへのやさしさが、あの珍しいクジャクヤママユをさなぎからかえたのではないのでしょうか。

このエーミールのやさしさと比べて、「僕」はどうでしょうか。ちょうをポケットに突っ込んだり、つぶしてしまうなど、明らかにちょうを大切に扱っていません。それに収集家としてのプライドが低いということが「エーミールの部屋からちょうを持ち出した」と書かれている点からすぐに分かります。したがって、エーミールは、僕とちがってちょうをがさつに扱う人ではないと言えます。

また、エーミールは、「結構だよ。僕は君の集めたやつは、もう知っている。そのうえ、今日、また君がちょうをどんなに取りあつかっているかということを見ることができたさ」と書かれてあるので、「僕」は明らかにちょうをよく扱っていないということが分かります。

よってエーミールの方が、ちょうを収集する人として適していると主張します。以上の内容をもって、エーミール側の立論を終わらせていただきます。

〈僕側〉

これから、僕グループの立論を始めます。

私たちは、ちょうを収集する人としてエーミールは僕より適してはいないと思います。根拠は3つあります。1つめは、ちょう集めにかかる情熱、2つめは、ちょうがどれだけ好きか、3つめは、僕のやさしさです。

1つめの根拠について説明します。教科書P221に、「僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ちこんでしまい・・・。」と出てきます。この情熱は、まわりが心配したほどです。これを私たち、現代の子どもたちにあてはめると、テレビやゲームにあたると思います。これらは、お母さんやお父さんにやめろといわれてもやめられないものではありませんか。僕の情熱はそれを上回るものだと思います。朝早くから夜になるまで、ひたすらやり続けることは、よほどの情熱じゃないとできないと思います。

2つめの根拠について説明します。僕がちょうをどれだけ好きかは、小さいころのちょうを捕るときの僕の気持ちに表れています。本文を読んでいると、こっちにまで僕のドキドキする気持ちが伝わってきそうなくらいです。特に、「とらえる喜びに息も詰まりそうになり、～その緊張と歓喜ときたらなかった。」のところは、本当によく僕の気持ちが伝わってきます。エーミールには、こんな気持ちがあったのでしょうか。私には、エーミールがそんな気持ちをもっているようには読み取れませんでした。

例えば、僕がコムラサキをつかまえたときのことで、僕はコムラサキをつかまえたことがうれしくてうれしくてたまらない様子ですが、僕に見せてもらったエーミールは、ちょうに値段をつけ、さらになんくせをつけたりと子どもの収集家として、おもしろみがないと思います。趣味のちょう集めは、ちょうが本当に本当に心から好きで、楽しむものだと思います。こう考えると、僕はちょうの収集家に適していると考えられます。

3つめの根拠の説明をします。これは、コムラサキとクジャクヤママユを例にとって説明したいと思います。僕は、右の触角が曲がっていたり、左の触角が伸びていたり、足が1本なかったり、欠陥があってもコムラサキをつかまえたことで得意になれたり、クジャクヤママユを見るだけでドキドキするような素直な人です。これらはきっと、僕のやさしさにつながるものだと思います。僕は、クジャクヤママユをつぶしてしまうということに対して、「盗みをしたことよりも自分がつぶしてしまった美しい珍しいちょうを見ている方が僕の心を苦しめた。」と言っています。これは、2つめの根拠と重なりますが、僕の良心の表れだと思います。

私たち僕グループは、ちょうの収集家にふさわしいのは、ちょうが好きか、ちょう集めを楽しめるか、そしてやさしさがあるかだと思います。したがって、僕の方が収集家に適していると思います。これで、僕グループの立論を終わります。